平成 18 年度国立情報学研究所実務研修報告書

平成 18 年 12 月 15 日
東北大学附属図書館　総務課情報企画係
永井　伸

内容

1. 研修内容
2. 研修の目的
3. 研修先及び研修期間
4. 実務内容
   4.1 研修スケジュール概要
   4.2 研修の企画・運営補助と聴講
   4.3 その他の聴講、出張、外出
   4.4 東北地区における研修の検討
5. 研修実務を通しての所感
   5.1 学術情報リテラシー教育担当者研修の企画・実施を通して
   5.2 大学図書館職員講習会について
   5.3 その他の所感
   5.4 NII の研修事業に対する提案
6. 実務研修を終えての感想
7. 参考資料
8. 添付資料

1. 研修内容

国立情報学研究所における教育研修事業の運営を経験することにより、研修の企画立案・実施の方法を修得する。また、東北地区における図書館職員研修について検討を行う。

2. 研修の目的

大学図書館では、これまで電子ジャーナル・文献情報データベースを始めとしたオンライン資料の導入や、情報リテラシー教育への取組みなど、新しい課題に柔軟に対応してきた。これは、周りを取り巻く状況の変化に応じて必要なスキルを身につけてきた一人ひとりの図書館職員の努力によるところが大きい。しかし、電子資料の増加等により求められる図書館サービスの質が高まる中、それに応えていくには個人の力量と自己研鑽だけに依存するのでは難しい。図書館職員に求められる能力を自ら考え、高めていくことができる

ような職員研修の機会を継続的に提供し、一人ひとりの努力をサポートする環境作りが欠かせない。

また、経費削減による職員数の減少や臨時職員の増加の中、安定して大学における研究・教育活動を支援するには、これまでに培ってきたスキルを次世代に引き継いでいくための研修の場も、普段から提供することが必要である。

図書館職員向けには既に様々な研修が実施されているが、サービスの維持、向上を続けていくためには国立情報学研究所（NII）等で実施している研修に加え、各機関、各地区でのさらなる自発的な研修機会の増加、研修の質の向上を図ることが求められる。

今回の実務研修では、図書館職員向け研修の企画・実施に今後自らが積極的に携わることができるようにするため、全国的な研修を提供している NII の研修係で実務を経験し、研修にまつわる様々な必要事項を習得することを一つの目的とした。また、研修係での実務や他地区における研修活動の調査等に基づき、東北地区において効果的な図書館職員研修を行うための方策について検討することとした。

3. 研修先及び研修期間

研修先：国立情報学研究所開発・事業部企画調整課研修係

研修期間：平成 18 年 8 月 1 日(火)～12 月 15 日(金)

4. 実務内容

4.1 研修スケジュール概要

詳細なスケジュールは別紙 1 に示す。概要は下記の通りである。

8 月：目録システム講習会の準備・受付、聴講。学術情報リテラシー教育担当者研修カリキュラム及び講師検討。学術ポータル担当者研修の聴講とアンケート集計（名古屋大学会場）。

9 月：学術情報リテラシー教育担当者研修、大学図書館職員講習会の実施準備（講師依頼、講義概要作成、講師との事前打合せ）が中心。大学図書館職員講習会の改善について検討。総合目録データベース実務研修聴講（10 月第一週に続く。）

10 月：大学図書館近畿イニシアティブ、国立大学図書館協会中国・四国地区協会における研修の状況調査等に基づき、東北地区における研修について検討。大学図書館職員講習会（京都大学会場）聴講。

11 月：東北地区における研修について引き続き検討。検討結果に対するフィードバックを東北大学に依頼。学術情報リテラシー教育担当者研修（NII 会場）聴講。実務研

修報告書、成果報告発表資料作成。

12 月：東北地区での研修検討、実務研修報告書、成果報告発表資料まとめ。
12 月 12 日：第 4 回開発・事業部専門研修にて実務研修成果を報告。（別紙 2）
12 月 15 日：実務研修修了。

4.2 研修の企画・運営補助と聴講

(1)目録システム講習会

聴講、受付、資料配布、会場準備、実習端末準備、講師との研修後打合せ陪席、所内ツアー引率を行った。

(2)総合目録データベース実務研修

聴講（10/3 に茗荷谷の図書館流通センター見学へも参加)、事後打合せ参加。

(3)学術ポータル担当者研修

聴講、資料印刷、実施補助（8/30-9/1 名古屋大学会場での受付、講義室設営、写真撮影等)、アンケート集計作業（名古屋大学会場、NII 会場分）を行った。

(4)学術情報リテラシー教育担当者研修

聴講、カリキュラム検討、講師検討、講師依頼、講義概要作成補助、講師との事前打合せ（9/8:国際基督教大学畠山氏、9/14:明治大学飯澤氏）を行った。

(5)大学図書館職員講習会

聴講（10/17-10/20 京都大学会場、11/14-11/15 東京大学会場)、講義概要作成、講師との事前打合せ（9/7:東邦大学山口氏、9/8: 国際基督教大学黒澤氏)、アンケート集計（京都大学会場分）を行った。

(6)目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討 WG

第 10 回 WG（8/10）に陪席し、議事録案の作成、ウェブサイトへのアップロード、WG メンバーへの通知を行った。

4.3 その他の聴講、出張、外出

・8/1　H18 第 2 回開発・事業部専門研修参加：OCLC 等現地調査報告
・8/28　広島大学図書館ワークショップ参加〔広島大学〕
・9/19　H18 第 3 回開発・事業部専門研修参加：北大実務研修生成果報告、IFLA 報告
・9/20　次世代スーパーコンピューティングシンポジウム参加〔MY PLAZA ホール〕

・9/21　第3回 eLPCO オープンフォーラム参加〔青山学院大学〕（別紙 3-1）
・10/16　大学図書館近畿イニシアティブ活動内容調査〔京都大学〕
・10/25　国立大学図書館協会中国・四国地区における研修の調査〔岡山大学〕
・10/26-27　第92回全国図書館大会参加〔岡山シンフォニーホールほか〕（別紙 3-2）
・11/17　国立情報学研究所教育研修事業国際シンポジウム参加〔東北大学〕（別紙 3-3）
・11/20　図書館総合展参加〔パシフィコ横浜〕（別紙 3-4）
・11/28　東京都図書館協会 IT 講習会聴講〔NII 20 階実習室〕
・12/7　国立国会図書館データベースフォーラム参加〔国立国会図書館〕（別紙 3-5）
・12/8　国立大学図書館協会関東地区・東京地区合同図書館新任職員フレッシュ・パーソン・セミナー聴講〔筑波大学〕（別紙 3-6）
・12/12　H18 第4回開発・事業部専門研修参加、実務研修成果報告
・12/14　第5回 SPARC Japan 連続セミナー参加〔NII 12 階会議室〕

4.4 東北地区における研修の検討

(1)検討の背景

東北地区には国公私立大学図書館の協力組織である東北地区大学図書館協議会があり、合同研修会と目録システム地域講習会が毎年定期的に行われ、フレッシュ・パーソン・セミナーが平成17年度に新たに開催されるなど、いくつかの研修を実施してきた。

地区で研修を実施することには、全国的な研修に比べ開催地が近く参加しやすいこと、単独で研修企画が難しい小規模館にも研修機会を提供できること、また、全国単位より動きやすく、地区加盟館の多様な視点を活かした工夫された研修プログラムの企画が期待できることなど様々なメリットがある。

しかし、現在は研修企画、実施体制が各県で持ち回りであったり、東北大学中心であったりと統一されておらず、研修の体系的な企画が行いにくい等の課題があり、加盟館が協力することのメリットが十分に活かされていない。

そこで、実務研修の機会を通して得た経験や、他地区における研修実施状況の調査で得られた知見等に基づいて、東北地区における研修のあり方について検討を行い、改善案としてまとめることとした。

(2)検討方法

検討にあたり下記資料の参照や、調査を行った。

・東北地区大学図書館協議会ウェブサイト [1)]

東北地区大学図書館協議会加盟館の状況や、協議会の研修実施状況を把握するのに利用した。

・大学図書館近畿イニシアティブ調査（別紙 4-1）

大学図書館近畿イニシアティブ[2)]とは、近畿地区の国公私立大学図書館の連携組織で、約 130 大学の集合体である。研修企画・実施のための組織として、「能力開発委員会」を設置しており、委員の京都大学辰野氏から活動内容について伺った。東北地区大学図書館協議会には研修企画を専門に取り扱う組織がないため、先行事例として参考になる点が多かった。

・国立大学図書館協会中国・四国地区研修事業調査（別紙 4-2）

岡山大学古中氏に中国・四国地区における研修の検討状況について伺った。NII の目録システム地域講習会の安定した実施のため、講師を開催館だけでなく地区として確保するという視点、また、県立図書館職員の聴講を許可する一方で、今後県立図書館での講習会実施を考えていること等、研修における公立図書館との相互連携という考え方が有用だった。

・研修関連ウェブサイト、研修関連資料等の調査

地区で行う研修内容を検討するため、ウェブサイトや記事等の調査を行った。

まず、文部科学省が実施している大学図書館実態調査の調査結果によると、臨時職員の増加が見て取れる。平成 16 年度の調査結果[3)]において、図書館職員一人当たりの学生数は、職員数総数に対する値はほとんど変化がないが、専任職員に対する数値が大幅に増加している。流動性の高い臨時職員が増加する傾向にあることから、業務スキルの継承が喫緊の課題である。

さらに、大学図書館実態調査の職務内容別の職員数集計結果を見ると、臨時職員の担当が最も多いのは閲覧業務である。全職員の約 2 割が閲覧業務担当の臨時職員である。利用者から見ても、閲覧カウンターにいる職員は図書館職員として最も認知されやすく、代表的な「図書館の顔」となる。増加する臨時職員を含めたカウンター担当職員のサービス向上を狙う研修を行うと実施効果が高いと考えられる。

業務の引継ぎ方について書かれた記事として「効果的なマニュアル作成法-ノウハウを伝えるノウハウ-」[4)]が「情報の科学と技術」誌に掲載されている。業務引継ぎについての図書館職員向け研修というのは全国的な実施例がおそらく無く、参照できる直接的な例がないと思われるため、今後詳細を検討する必要がある。

また、カウンターでの利用者対応の研修については、英国図書館・情報専門家協会（CILIP）の研修プログラム「Giving a good answer」[5)]、国立国会図書館の「レファレンス研修」のカリキュラムを参考にした。

大学図書館職員講習会のアンケートを見ると、平成 15 年度までは講師、内容が国立大学に偏っているとの声があった。東北地区でも国公私立のどの設置母体でも共通に有用な内容にする必要があるが、上記の研修はこれに当てはまる。

当初は東北地区で行う必要のある新しい研修の内容を検討するという狭い観点しか持てず、ウェブサイトや記事等を参照しながら研修内容について検討を行っていた。しかし小陳補佐、成澤係長との打合せの中で、研修を企画する体制の再構築が必要という指摘があり、大学図書館近畿イニシアティブと、国立大学図書館協会中国・四国地区での研修活動の調査を行うこととなった。

また、東北大学にも原案を提示し、フィードバックを依頼した。その結果も提案書の修正に活かした。

(3)検討結果

検討の結果、研修検討ワーキンググループを設置し、地区で行う研修体系の再構築と研修の継続的な企画を行うことを提案書としてまとめた（別紙 5-1)。

また、研修内容については今後ワーキンググループで検討するべきだが、職員数の減少や臨時職員の増加に対応するため技能の継承や共有が重要との考えから、業務引継ぎ研修（業務マニュアル作成、他館との業務方法の比較による議論等）を行うこと、また、規模の違いによらず多くの加盟館で有用と考えられるカウンターでの利用者対応スキルを改善するための研修を具体案として作成した。(別紙 5-2、別紙 5-3)

今後、作成した資料を利用して平成 19 年 7 月にある東北地区大学図書館協議会幹事会等で提案を行い、9 月の総会での実現に向け動いていく予定。

5. 研修実務を通しての所感

5.1 学術情報リテラシー教育担当者研修の企画・実施を通して

私が東北大学で 1 年生向けにレポート作成や情報検索を教える「大学生のための情報検索術」の授業に関わっていることもあり、この研修ではカリキュラムの検討、一部の講師との事前打合せなど、実施までの過程に広く携わった。

(1)カリキュラムと講師の検討

当初案では、カリキュラムは青山学院大学野末助教授の概論、日本ユニシス・ラーニング株式会社講師によるインストラクショナルデザインとオリエンテーション&プレゼンテーション、事例報告中心の講義（冊子教材作成、電子教材作成、教員(授業)との連携、広報・評価活動の 4 テーマ)、NII が提供しているものを中心とした学術コンテンツの講義、共同討議からなっていた。

大学図書館で実施する情報リテラシー教育の内容は図書館利用ガイダンス、OPAC の利用法、電子ジャーナル・文献情報データベースの利用法という 3 つであることが多いと思われる。Google 等の検索エンジンを使い慣れた学生に対し、操作方法が容易になってきている最近の電子ジャーナルや文献情報データベースといったオンラインツールの操作方法だけを説明したとしても得るものは少なく、それらのツールを含む図書館の提供資料をなぜ

使う必要があるかを説得できなければ、受講者の増加や情報リテラシー教育効果の向上は望めない。

レポート・論文の作成は学生を初めとする利用者が最も図書館を必要とする機会の一つであり、うまい作成方法がわからず困っている学生も多い。レポート作成方法についての知識を図書館員が持てば、図書館が提供する資料の有用さや、情報検索の技術を身につけることの必要性を自信を持って伝えられるようになると考え、レポート作成方法に関する講義を実施することにした。

また、事例報告に適した取組みを探す時は、「雑誌記事索引」で記事を検索し、情報資料センターで入手した。しかし、最新の事例等、良い実例は必ずしも記事として発表されているとは限らないため、人脈を通じた情報収集の重要性を感じた。

カリキュラムが決定した後は、それぞれのプログラムを担当できる講師を探すことになる。レポート作成方法の講義は東北大学の授業「大学生のための情報検索術」でレポート作成の講義を担当している教員にお願いできた。ここでも普段からの人脈形成の重要性を認識した。

その後、依頼する講義、報告の内容をそれぞれの講師に伝える講義概要の作成を担当した。カリキュラムに基づいてできるだけ具体的に記載するため、講師や講師の所属館の職員により発表された雑誌記事や、ウェブサイトを参照しながらそれぞれの講義について作成した。やはり、講師の今までの業務内容や情報リテラシー教育の実施経験をある程度把握した上でないと書くのが難しい。普段から大学図書館における情報リテラシー教育の実情を把握できる、大学図書館との連携体制が求められる。

事例報告では取組みの単なる紹介に終わらず、工夫している点、売りにしている点等のメッセージがあると受講者が参考にしやすい。講師自身は工夫していると思っていないことでも、外部者から見ると役に立つ場合がある。そういったメッセージを引き出すには講師と直接話しながら、良いと思った点、参考になった点を伝える必要がある。明治大学での打合せでは、当初メッセージがはっきりしていなかったようだが、打合せ後に「講義について少しイメージが湧いてきた」との言葉を頂いた。

講師依頼のための事務手続きでは、必要な事項を全て書き込めるような書式を Excel 等で作成しておくと講師、研修係ともに楽になる。所属長役職名、謝金の受け取り可否、懇親会参加可否、出張日程等かなり多くの事項が必要であるので、一度にまとめて問い合わせられるとよい。

(2)実施を終えて

レポート作成方法の講義は受講者にどのように受け取られるか不安だったが、おおむね好評であった。講義の中で引用や参考文献リストの話が出なかったため、レポート作成のためには図書館資料や情報検索が必要であるというポイントを受講者が捉えにくかったかもしれない。今後は引用や参考文献リストについて触れ、レポートや論文が、図書や論文

等に掲載されたこれまでの成果に基づいて作成されることを強調することが望まれる。

「レポート作成指導」のアンケート結果には以下のような声があった。

・今までうけたことのなかった内容で大変ためになった。これから自信を持って学生に指導できる。

・これからやらなくてはならないと感じていたので参考になった。教員がどんなレポート課題を出しているのか調べる必要があると感じた。

・学生に指導して行く中で、先生が求めるレポートとはどのようなものだろうかという疑問があったため、今回の講演はとても有益なものでした。

・実践的な内容として、ガイダンスの際に生かせそう。

・学生が習得すべきリテラシーのひとつレポート作成について、図書館員は当然もっているべき。しかし（自分を含めて）きちんと大学で指導を受けていないあるいは忘れてしまった人が多いのではないか。この授業は、全ての図書館員で共有したい。

図書館員がレポートの書き方まで踏み込めるのかという意見もあったが、上記のように図書館員が教える内容の一部としてレポート作成法を取り入れようという積極的な姿勢も見られた。レポート作成方法の講義は日本の大学ではまだ普及しておらず、教えるのは図書館員にとり負担が大きいかもしれないが、提供できれば図書館による情報リテラシー教育は大学教育に欠かせない要素となる。

また、誰を対象とし、どのような目的で情報リテラシー教育を行うかといった根本的な部分から教育プログラムを組み立てる「インストラクショナルデザイン」は、受講者から戸惑いの声もあったが、講義の目的をはっきり認識してもらえば非常に有用で、本研修の中核部分になると感じた。先にも述べたように、図書館の情報リテラシー教育は、図書館ガイダンスやオンラインツールの利用方法等、内容が固定されていることが多く、図書館が何をどこまで教えるべきかを改めて考え直す機会が少ない。講義や事例報告から、また「図書館利用教育ハンドブック」[6)]等の情報リテラシー教育に関するまとまった情報源から教育内容として考えられる多様な選択肢を知り、自分の大学ではどのような対象者にどのような教育内容が求められるかを考えて実施することで、効果の高い情報リテラシー教育が実施できると考えられる。

(3)今後のカリキュラム作成時の留意点

昨年度は NII で提供しているオンラインコンテンツの紹介があったが今年度は実施しなかった。オンラインデータベースや電子ジャーナルといったオンラインツールについての講義を求める声もあると思うが、それらの数は膨大で全てを紹介することはできない。限られたものだけを紹介しても、大学の学部構成等により必要なツールは異なるため受講者に広く有用な講義となりにくい。オンラインツールについては最近多く刊行されている大学図書館利用ガイドの類を見て、受講者自身が学ぶのが妥当と感じる。

幅広い受講者にとってより有用なのは、一般的な情報検索の流れや、どのデータベース

にも共通して応用可能な検索時の注意事項等をまとめた情報検索方法の講義ではないか。例えば「情報検索のスキル」[7)]の著者である三輪眞木子氏等が講師の候補として挙げられる。

また、広報の方法についての講義も求められていると思うが、情報リテラシー教育の中身を充実させるのが最も大事であると感じる。中身が良くて学生に役立てば、口コミによる受講者の拡大が期待できる。逆に中身が悪ければ、広報で人が多く集まろうと、二度と図書館講習会に参加しないと考える利用者も出てくるだろう。研修では教育内容改善のためのプログラムを中心とし、広報に関する講義は余裕のある場合にのみ入れるのが良いのではないか。

5.2 大学図書館職員講習会について

過去のカリキュラムやアンケート結果を基に、今後の実施に向けてどのような改善が必要であるか検討を行った。また、一部の講師との事前打合せ、講師向けの講義概要の作成、京都大学での聴講、アンケート集計（京都大学会場分）を行った。（別紙 6-1～3）

(1)聴講後の所感

今年度の研修内容は、受講者が大学図書館の現状を広い視野で捉えられるのに加え、図書館業務に従事するモチベーションが高まる内容となっていた。ただし、講義の数が多く、何らかの実習や作業を設ける必要を感じた。

また、共同討議では班により進行具合に差があり、予定時間を超過する場合もあったので、助言者等から討議進行の目安（メンバーの紹介、テーマの決定、発表内容の具体化、発表資料の作成等のペース配分）について助言があると良い。現状では助言者がほとんど討議に関わらない場合も多く、助言者を頼まれる側も必要性に疑問を感じることがあるのではないか。

さらに、海外の図書館事情についての講義は、平成 18 年度の教育研修事業国際シンポジウムのように海外の図書館で勤務している図書館員に担当して頂けると業務の細部や、実感を伴った話を聞くことができる。海外図書館との交流のきっかけともなり得るので検討する価値はあると考える。

次年度以降のカリキュラムを全体的に見直すには、アンケート結果や、運営にあたる東京大学、京都大学からのフィードバックに加え、会場の雰囲気を掴むために NII の職員が通して参加できると良い。

また、受講者アンケートの評価基準を、特に技術や規則を習得する講義でない限り、「理解できた」かどうかではなく「参考になった」かどうかで統一すると講義テーマの良し悪しが評価しやすくなるのではないか。

(2)レポート作成導入の提案

学術ポータル担当者研修、学術情報リテラシー教育担当者研修では、共同討議の他にロ

ールプレイやインストラクショナルデザインなど、受講者自身が考えて作業を行うプログラムが加わることにより充実した内容になっている。ところが大学図書館職員講習会にはそのような要素が少ない。そこで、受講者それぞれが自分でテーマを持ち、レポートを作成する時間を含めることを提案したい。4日間通常業務を離れ図書館について考えを深められる貴重な機会であり、図書館での業務経験が少ないうちに感じた新鮮な印象や常識に囚われない考えをまとめ、今後の活動に生かせるような形で残しておくことには意義がある。

また、考えた内容をレポートとしてまとめれば、所属機関に戻ってから、他の職員に自分の所感を伝えるのも楽になる。京都大学会場で「図書館職員研修を企画する。」を共同討議テーマとして選んだ班に同席したが、研修後に他の職員に伝えられること、研修成果を共有できることが必要なポイントとして指摘されていた。所属機関に戻ってから、研修中に配付された資料を回覧するだけでなく、受講者が研修内容を咀嚼して考えた内容をレポートとしてまとめて成果報告を行うことにより、所属機関への研修成果のフィードバックが充実したものになる。

研修中にレポートを仕上げるのは難しいと考えられるため、レポート作成方法の講義とアウトライン作成のための実習時間を研修中に設け、レポート完成は研修後に行うのが現実的である。共同討議が必ずしも自分の意見や希望に沿った方向、テーマで進むわけではないので、共同討議発言要旨の内容を基にレポートを作成するのが一つの方法である。

5.3 その他の所感

(1)工夫された研修形式

NIIで研修の実務や聴講を行う中で、研修形式の工夫により受講者が興味深く研修に参加できるようになっているプログラムがあり参考になった。

学術情報リテラシー教育担当者研修では、プレゼンテーションの方法を模範的な例と理論の組合せで講義したり、情報リテラシー教育プログラムの設計方法を実習を通じて習得するという内容が大変効果的だと感じた。これらのプログラムは研修コンサルタント業者が実施しているが、業者に一任するのではなく、NII研修係の意見により内容をカスタマイズすることで図書館職員にとって有効なものとなっている。

学術ポータル担当者研修では、ロールプレイ、著作権の実習が好評だった。実際に体験できる形式のプログラムに対する要望は高い。受講者が一方的に教わるのではなく、自らアイデアを考える機会を作ることで、所属機関に戻った後の活動に研修成果が反映されやすくなる。東北地区での研修企画の際も積極的に取り入れたい。

また、目録システム講習会では、今年度からセルフチェックテストが試行され、研修内容がどの程度身についているかを確認することができるようになっている。3日間の研修の間に習得の度合いを確認し、不足の点を補えるのは受講者にも講師にも有用である。技術を身につける研修ではこのようなテストは有効と考えられるので、ウェブで実施するのは難しいかもしれないが、東北地区での研修でも取り入れられると良い。

(2)人と人のつながりを生む配慮

研修にはスキルを身につけるだけでなく、他の機関で働く職員との交流を深められるという意義もある。NII の研修では、それを促進するための配慮が様々行われていると感じられた。

例えば、総合目録データベース実務研修では、研修生、講師、NII スタッフの自己紹介を集めた資料を作成し、配付している。

また、目録システム講習会・ILL システム講習会では受講生が協力して作業する場面はないが、昼休みに部屋を開放し「懇親ランチ」を行っている。ランチマップの配布も行い、初めて来る利用者にとってはありがたい配慮がなされている。毎日研修終了後に講師との打合せがなされ、外部の講師を含めたコミュニケーションの強化が図られている点も良い。

今年度からは所内ツアーを行い、NII の紹介に努めている。一度引率を行ったが、NII がどのような場所で、どのような体制で業務をしているかに関心を持っている大学図書館職員は多いはずで、NII と大学図書館とのつながりに大いに役立っていると感じる。

このような、日常業務と異なる場所や人との関わりを楽しめるようにするための様々な配慮は見習うべきところが多く、今後活かしていきたい。

5.4 NII の研修事業に対する提案

(1)研修アピールの必要性

学術ポータル担当者研修、学術情報リテラシー教育担当者研修を始めとして、様々な工夫の重ねられた質の高い研修が NII では行われている。研修事業のウェブサイトや、雑誌記事でこれらの研修の紹介を行っているが、さらにアピールを強化することで、研修事業の必要性、有用性を示すことができ、研修実施体制の維持につながるのではないか。これからも現在の研修内容を維持・向上していくには、現行の体制では厳しいと感じた。

研修アピールを強化する方法として、例えば次のようなことが考えられる。

まず、文教速報等に研修の実施結果の報告が掲載されるが、いずれも会場館、共催館の記事のみが記載されている。企画を担当する NII と運営や実施に携わる大学図書館では研修に対する視点が異なるはずなので、例えば今年度の研修カリキュラムの狙いや特徴を記事に含めるというように NII の視点から研修をアピールする記事があると良い。

また、大学図書館職員講習会では運営を東京大学、京都大学に任せており、NII の職員が通して参加していない。受講者からは NII の貢献が見えづらく、研修の狙いのアピールも難しい。アンケートはとっているが、そこに現れない現場の雰囲気もあるはずなので、常に一人は派遣したほうが良いと感じる。

さらに、平成 17 年度までの NII の概要には研修事業について記載があったが、平成 18 年度の NII の概要[8)]には見当たらない。例えば平成 17 年度の概要には「大学・研究機関において学術研究活動支援の中核的な役割を担う職員を養成するため、学術ポータルやネッ

トワークに関する専門研修、総合目録データベース構築等に関する講習会などを行っています。また、各関係機関との協力により、学術研究活動支援の中核となる人材育成を目的とした各種の研修を実施しています。」との記載がある。

数少ない人材育成のための専任係を持つ組織として、重要性は今後ますます高まるはずである。個々の研修のアピールと共に、それらの総体としての研修事業のアピールも重要である。

ただ、研修係の実情を見ると多大な労力を広報に割くことは難しい。上記以外の広報手段として研修成果を利用するのが効果的ではないか。例えば大学図書館職員講習会でレポート作成を課し、所属機関に持ち帰ってもらうことや、受講者が所属図書館の館報に掲載する研修の報告記事を NII で公開すること、研修後に提出してもらう受講者アンケートを公開するといったことが考えられる。

(2)大学図書館との連携強化

NII の研修事業では、大学等において日本の学術情報基盤を支える人材の育成に取組むことで、大学図書館の底上げを図っている。

中でも、目録システム講習会、ILL システム講習会、学術ポータル担当者研修等は NII で行う他の事業やサービスと密接に関連している。事業やサービスを推進する中で大学図書館との連携機会があり、目指すべき方向がはっきりしているため、研修の目的や内容も明確に組み立てやすい。

しかし、学術情報リテラシー教育担当者研修や大学図書館職員講習会では、広く図書館職員に必要なスキルの底上げを目指している。大学図書館が今後進むべき方向性を考えて内容を検討する必要があるが、カリキュラム検討における大学図書館と NII との連携体制は十分ではない。

これらの研修の企画では、大学図書館との密接な連携が可能となるような体制作りが欠かせない。大学図書館職員講習会の企画には東京大学と京都大学が参加しているが、私立大学も含めたより広い視点から大学図書館や情報リテラシー教育の方向性について検討し、研修カリキュラムを組み立てることが必要である。

また、「小規模大学ではリポジトリの構築などなかなか実現が難しいと思いますので、全体の底上げを目指した取組みを希望しております。(学術ポータル担当者研修アンケート)」というアンケート結果にもあるように、NII によるさらなる大学図書館底上げのための取組みに対する要望は高い。

しかし、平成 15 年度に学術ポータル担当者研修と学術情報リテラシー教育担当者研修、平成 16 年度に大学図書館職員講習会といったように提供する研修数が増えている中、少なくとも現在の体制では、NII のみで新しい研修の企画から実施までを行うことは難しい。

大学図書館の底上げにはビジョンが必要であるが、NII だけでそれを考えることはできない。新たに必要な研修はまず大学や地域で企画、実施し、必要性を判断するのが良いので

はないか。その後、地域での実績を踏まえて NII で全国的に実施するという流れが現実的だと感じる。

6. 実務研修を終えての感想

実務研修で研修事業に携わるのが決まるまで NII の研修は受講したことがなく、実情も知らなかったが、別会場で複数の研修が重なって実施されることもあるような過密なスケジュールで行っていることを知って驚いた。その中で 4 ヶ月半という限られた期間ではあったが、研修の企画から実施までを広く体験できたことは貴重だった。

さらに、研修の企画、実施、聴講、出張等を通じていろいろな方と知り合え、人脈が広がった。東北大学で勤務しているだけでは知りえなかった方々と交流の機会を持て、今後いろいろな場面で助かると思う。

また、普段は電子ジャーナルの利用手続き等の日常業務に追われることが多い中、研修内容の検討を通して、情報リテラシー教育の今後のあり方等、長期的な視野で自分なりに考えるための時間が得られた。大学での業務に取組む姿勢を見直すいい機会となった。

受入れに際して不足している点があるとすれば、受入れ先の業務内容がある程度具体的にイメージできる情報を、事前に研修生に提供することではないか。研修目標を研修開始前に提出するが、実際の業務内容は不明なところも多く、見当外れの目標を定めてしまう可能性もある。研修が始まってから目標を修正することは可能だが、ある程度具体的な目標が研修前に設定できるとスムーズに研修に取り組めると思う。

最後に、実務研修を進めるにあたり、受入態勢やコンピュータ設定等の業務環境の整備、スケジュールの作成、出張手続き等、研修に打ち込める環境を NII 関係者の方に提供して頂きました。どうもありがとうございました。また、実務研修の方針や作成した資料について貴重なご意見を頂き、東北地区における研修の検討内容が深まりました。関係者の皆様どうもありがとうございました。

7. 参考資料

1)東北地区大学図書館協議会ウェブサイト
http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/
2)大学図書館近畿イニシアティブウェブサイト
http://wwwsoc.nii.ac.jp/initia/
3)平成 16 年度大学図書館実態調査結果報告
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index20_16.htm
4)鈴木ゆかり，関美分，効果的なマニュアル作成法-ノウハウを伝えるノウハウ-，情報の科学と技術，56(1) p. 25-31，2006
5)英国図書館・情報専門家協会（CILIP）の研修プログラム「Giving a good answer 」
http://www.cilip.org.uk/training/training/2006/persdev/givingagoodanswer.htm

6)日本図書館協会図書館利用教育委員会編，図書館利用教育ハンドブック，2003
7)三輪眞木子，情報検索のスキル:未知の問題をどう解くか，2003
8)国立情報学研究所概要
http://www.nii.ac.jp/results/pr_data/leaflet-j.shtml

8. 添付資料

別紙 1：実務研修スケジュール
　参考 1：実務研修開始当初のスケジュール案（8/7 作成）
　参考 2：実務研修の進捗状況（10/4 作成）
別紙 2：実務研修成果報告発表資料（12/12 発表）
別紙 3：各種出張報告
　別紙 3-1：第 3 回 eLPC0 オープンフォーラム参加報告（9/21 参加、9/29 作成）
　別紙 3-2：第 92 回全国図書館大会参加報告（10/26-27 参加、10/31 作成）
　別紙 3-3:平成 18 年度国立情報学研究所教育研修事業国際シンポジウム参加報告(11/17 参加、12/15 作成）
　別紙 3-4：第 8 回図書館総合展参加報告（11/20 参加、11/27 作成）
　別紙 3-5：国立国会図書館データベースフォーラム参加報告（12/7 参加、12/15 作成）
　別紙 3-6：国立大学図書館協会関東地区・東京地区合同図書館新任職員フレッシュ・パーソン・セミナー参加報告（12/8 参加、12/12 作成）
別紙 4：他の地区における研修検討・実施体制の調査報告
　別紙 4-1：大学図書館近畿イニシアティブにおける研修の調査報告（10/16 調査、10/31 作成）
　別紙 4-2：国立大学図書館協会中国・四国地区における研修の調査報告（10/25 調査、10/31 作成）
別紙 5：東北地区における研修検討・実施の再検討について
　別紙 5-1：東北地区大学図書館協議会における研修の再検討について
　別紙 5-2：「カウンター対応研修」講習会の開催について（案）
　別紙 5-3：「業務引継ぎ研修」の開催について（案）
別紙 6：大学図書館職員講習会について
　別紙 6-1：平成 18 年度大学図書館職員講習会（京都大学会場）参加報告（10/17-20 開催、10/31 作成）
　別紙 6-2：平成 18 年度大学図書館職員講習会（東京大学会場）聴講所感（11/14-17 開催、11/30 作成）
　別紙 6-3：大学図書館職員講習会改善案（9/22 作成、12/1 修正）

以上

平成18年度 実務研修スケジュール （永井 伸）

別紙 1

月	日	曜	出張	午前	午後1	午後2	備考
8	1	火		打合せ：実務研修オリエンテーション		聴講：開発・事業部専門研修(OCLC等報	
	2	水		聴講：目録システム講習会（雑誌コース）			雑誌(NII)
	3	木					
	4	金					
	5	土					
	6	日					
	7	月		作業：ポータル研修 (NII)アンケート集計	聴講：目録システム講習会（図書コース・業者対象）		図書(NII・業者対象)
	8	火					
	9	水					
	10	木		会議：目録系講習会等検討WG			
	11	金		作業：WG議事要旨(案)作成		打合せ：今後の進め方	
	12	土					
	13	日					
	14	月		作業：学術情報リテラシー担当者研修 カリキュラム・講師案作成		作業：WG議事要旨(案)修正・送信	
	15	火		作業：学術情報リテラシー担当者研修 カリキュラム・講師案作成		打合せ：DB研修,リ研修,職講習カリキュラム	
	16	水		作業：学術情報リテラシー担当者研修 講義概要作成 作業：学術情報リテラシー担当者研修 講師への打診準備			
	17	木		作業：学術情報リテラシー担当者研修 講師への打診準備			
	18	金		作業：学術情報リテラシー担当者研修 講師への打診 作業：大学図書館職員講習会 カリキュラム・講師検討			
	19	土					
	20	日					
	21	月		作業：学術情報リテラシー担当者研修 講師への打診 作業：大学図書館職員講習会 カリキュラム・講師検討			
	22	火		作業：大学図書館職員講習会 カリキュラム・講師検討			
	23	水		作業：目録システム講習会（図書）運営	作業：ポ研修(名大)準備, ILL講(広島)準備	作業：目録システム講習会（図書）運営	図書（NII） 雑誌（大阪市立大）
	24	木		作業：目録システム講習会（図書）運営	作業：リ研修講師依頼, 職員講習会検討	作業：目録システム講習会（図書）運営	
	25	金		作業：目録システム講習会（図書）運営	作業：リテラ研修・DB研修 講師依頼	作業：目録システム講習会（図書）運営	
	26	土					
	27	日					
	28	月	広島	出張：広島大学図書館ワークショップ「学術情報の新しいチャネル - 海外機関リポジトリの動向をさぐる-」聴講			
	29	火	名古屋	出張：学術ポータル担当者研修 運営補助・聴講			図書（金沢大）
	30	水					
	31	木					

月	日	曜	出張	午前	午後1	午後2	備考
9	1	金	名古屋	出張:学術ポータル担当者研修 運営補助・聴講			図書(金沢大)
	2	土					
	3	日					
	4	月		打合せ:ポ研修総括,リ研修・職講習懸案	作業:ポータル研修(名大)アンケート集計		
	5	火		打合せ:リテラ研修受講者選考,リ研懸案	作業:ポータル研修(名大)アンケート集計		
	6	水		作業:学術ポータル担当者研修(名大)アンケート集計 作業:大学図書館職員講習会 講義概要作成			図書(神戸大) 図書(琉球大)
	7	木		打合せ:職講講師 アスペクトコア・保科氏	作業:講師打合せ準備	外出:東邦大学(職員講習会 講師打合せ)	
	8	金		作業:リテラシー教育担当者研修 講師依頼	外出:国際基督教大学(リテラシー教育担当者研修・大学図書館職員講習会講師打合		
	9	土					
	10	日					
	11	月		作業:学術情報リテラシー教育担当者研修 講師依頼文書作成 作業:学術ポータル担当者研修(名大)アンケート集計修正			
	12	火		作業:学術情報リテラシー教育担当者研修 講師との連絡 作業:大学図書館職員講習会 講師連絡準備			
	13	水		作業:学術情報リテラシー教育担当者研修 講師概要作成 作業:大学図書館職員講習会 過去受講者アンケート分析			図書(名古屋大)
	14	木		作業:ILL講習会受講者選定リスト作成	外出:明治大学(リテラ研修 講師打合せ)	作業:職員講習会受講者アンケート分析	ILL(広島大)
	15	金		作業:大学図書館職員講習会 過去受講者アンケート分析			
	16	土					
	17	日					
	18	月					
	19	火		作業:大学図書館職員講習会見直し案作成		聴講:開発・事業部研修(実務研修報告)	
	20	水		外出:次世代スパコンシンポ(CSI分科会)	作業:大学図書館職員講習会見直し案作成		図書(関西学院大) 雑誌(岡山大)
	21	木		作業:職員講習会見直し案作成	外出:青山学院大学(eLPCOオープンフォーラム「e-Learning専門家の人材育成」聴講)		
	22	金		作業:大学図書館職員講習会見直し案作成 打合せ:大学図書館職員講習会見直し案			
	23	土					
	24	日					
	25	月		作業:他の研修の調査	聴講:総合目録DB実務研修(基本思想)	作業:他の研修の調査	※リテラシー研修講義資料締切
	26	火		作業:海外文献調査		聴講:総合目録DB実務研修(討議)	総合目録データベース実務研修
	27	水		作業:リテラシー研修 班別討議資料作成 作業:東北地区研修企画検討		聴講:総合目録DB実務研修(事例報告)	
	28	木		作業:東北地区研修企画検討		聴講:総合目録DB実務研修(WG報告)	
	29	金		作業:東北地区研修企画検討	聴講:総合目録DB実務研修(講習会説明)	作業:東北地区研修企画検討	
	30	土					

月	日	曜	出張	午前	午後1	午後2	備考
	1	日					
	2	月		聴講:総合目録データベース実務研修(プレゼンテーション演習)			総合目録データベース実務研修
	3	火		作業:リテラシー研修班分け資料作成	外出:総合目録データベース実務研修(TRC見学)		※職員講習会講義資料締切
	4	水		作業:進捗状況打合せ資料作成			
	5	木		打合せ:進捗状況	作業:東北地区研修企画検討	聴講:総合目録DB実務研修(発表)	
	6	金		作業:東北地区研修企画検討			
	7	土					
	8	日					
	9	月					
	10	火		作業:大学図書館職員講習会アンケート分析			
	11	水		作業:東北地区研修企画検討			学術情報リテラシー教育担当者研修(阪大)
	12	木		作業:東北地区研修企画検討 作業:リテラシー研修班分け資料作成			
	13	金		作業:東北地区研修企画検討			
	14	土					
	15	日					
10	16	月	京都	出張:大学図書館職員講習会 運営補助・聴講 近畿イニシアティブ 聞き取り調査			
	17	火					
	18	水					雑誌(NII)
	19	木					
	20	金					
	21	土					
	22	日					
	23	月		作業:大学図書館職員講習会(京都)アンケート集計 作業:出張報告書作成			
	24	火		作業:大学図書館職員講習会(京都)アンケート集計 作業:出張報告書作成			
	25	水	岡山	出張:中国四国地区 地域講習会事業グループ 聞き取り調査			
	26	木		出張:全国図書館大会			
	27	金					
	28	土					
	29	日					
	30	月		作業:東北地区研修企画検討 作業:出張報告書作成			
	31	火		打合せ:進捗状況	作業:東北地区研修企画検討		図書(NII)

月	日	曜	出張	午前	午後1	午後2	備考
11	1	水		作業:東北地区研修企画案作成			図書(NII)
	2	木		作業:東北地区研修企画案作成			
	3	金					
	4	土					
	5	日					
	6	月		作業:東北地区研修企画案作成 作業:実務研修報告書案作成			
	7	火		作業:東北地区研修企画案作成	打合せ:進捗状況	作業:リテラシー教育担当者研修準備	
	8	水		聴講:学術情報リテラシー教育担当者研修			学術情報リテラシー教育担当者研修(NII)
	9	木					
	10	金					
	11	土					
	12	日					
	13	月		作業:実務研修報告書案作成			
	14	火		聴講:大学図書館職員講習会			大学図書館職員講習会(東大)
	15	水		作業:実務研修報告書案作成		聴講:大学図書館職員講習会	
	16	木		作業:実務研修報告書案作成			ILL(NII)
	17	金	仙台	出張:NII教育研修事業国際シンポジウム「求められる図書館サービスとスタッフ・ディベロップメント」聴講			
	18	土					
	19	日					
	20	月		作業:実務研修報告書案作成	外出:図書館総合展 見学		図書館総合展
	21	火		作業:実務研修成果発表資料作成			
	22	水		作業:リテラシー研修反省会, 進捗打合せ	作業:実務研修報告書案作成		
	23	木					
	24	金		作業:進捗打合せw/課長	作業:実務研修報告書案作成	作業:リテラ研修反省会w/日本ユニシス	
	25	土					
	26	日					
	27	月		作業:実務研修報告書案作成			
	28	火		作業:実務研修報告書案作成	聴講:東京都図書館協会IT講習会	作業:実務研修成果発表資料作成	
	29	水		作業:実務研修成果発表資料作成		作業:進捗打合せ	ネットワーク管理担当者研修(東京, 大阪)
	30	木		作業:実務研修報告書案作成 作業:東北地区研修企画書作成			

月	日	曜	出張	午前	午後1	午後2	備考
12	1	金		作業：東北地区研修企画案作成 作業：実務研修報告書案作成			NW管理担当者研修（東京，大阪）
	2	土					
	3	日					
	4	月		休み	作業：東北地区研修企画案作成 作業：実務研修報告書案作成		
	5	火		作業：東北地区研修企画案作成	作業：進捗打合せ	作業：東北地区研修企画案作成	
	6	水		打合せ：課長進捗報告	作業：実務研修報告書案作成	作業：実務研修報告書案作成	雑誌(NII会場/東大)
	7	木		外出：国立国会図書館データベースフォーラム			
	8	金		作業：実務研修成果報告発表資料作成	外出：フレッシュパーソンセミナー（筑波大）		
	9	土					
	10	日					
	11	月		作業：実務研修成果報告発表資料作成			
	12	火		作業：実務研修成果報告発表練習		講師：開発・事業部研修(実務研修報告)	
	13	水		作業：実務研修報告書作成			図書（NII）
	14	木		作業：実務研修報告書作成	聴講：SPARC Japan連続セミナー		
	15	金		作業：実務研修報告書作成	実務研修修了式 打合せ：報告書、職講	作業：実務研修報告書修正	

【実務研修開始当初のスケジュール案】

参考 1

平成 18 年 8 月 7 日作成

平成 18 年度国立情報学研究所実務研修（教育研修事業）スケジュールメモ

	研修・事項等	日程	実務	備考
8 月前	（運営補助及び聴講により、研修事業の基礎を学ぶ）			
	カリキュラム・講師策定（総合目録 DB、リテラシー、職員講習会）			
	講師内諾、依頼（総合目録 DB、リテラシー）			
	CAT 雑誌②	8/2～8/4	運営補助聴講	
	締切（CAT 図書名大・関学大、雑誌岡山大、ILL 広島大）	8/4		
	受講者選考（CAT 図書名大・関学大、雑誌岡山大、ILL 広島大）			
	CAT 図書業者	8/7～8/9	運営補助聴講	
	WG⑧	8/10	陪席	
8 月後	（続．運営補助及び聴講により、研修事業の基礎を学ぶ）			
	講師内諾、依頼（職員講習会）			
	討議テーマ策定（職員講習会）			
	CAT 図書③	8/23～8/25	運営補助	
	CAT 雑誌阪市大	8/23～8/25		成澤出張
	締切（リテラシー、職員講習会）	8/25		
	受講者選考（リテラシー、職員講習会）			
	広島大学図書館ワークショップ	8/28		永井参加希望
	ポータル名古屋	8/30～9/1		成澤出張 永井補助・聴講希望
9 月前	過去のアンケート、実施記録を元に、職員講習会の改善案を考える。 職員講習会の他の研修に対する位置づけを考える。			
	テキスト原稿まとめ（リテラシー）			
	締切（CAT 図書④、CAT 雑誌③、ILL③）	9/8		
	受講者選考（CAT 図書④、CAT 雑誌③、ILL③）			

9 月後	過去のアンケート、実施記録を元に、職員講習会の改善案を考える。 職員講習会の他の研修に対する位置づけを考える。			
	テキスト原稿まとめ（職員講習会）			
	総合目録 DB(1)	9/25～9/29		
10 月前	過去のアンケート、実施記録を元に、職員講習会の改善案を考える。 職員講習会の他の研修に対する位置づけを考える。			
	総合目録 DB(2)	10/2～10/6		
	リテラシー関西	10/11～10/13		成澤出張
	締切（NW 管理②）	10/13		
10 月後	実際に聴講した結果に基づき、職員講習会の案を練る。			
	職員講習会関西	10/17～10/20		永井補助・聴講希望
	CAT 雑誌③	10/18～10/20		
	WG⑨	(10/23-10/27)		
	締切（CAT 図書⑤、雑誌東大）	10/27		
	CAT 図書④	10/31～11/2		
11 月前	実際に聴講した結果に基づき、職員講習会の案を練る。			
	リテラシー関東	11/8～11/10		永井補助・聴講希望
	職員講習会関東	11/14～11/17		
	ILL③	11/15～11/17		
11 月後	職員講習会についての検討結果をまとめる。			
	NW 管理②	11/29～12/1		
12 月前	職員講習会についての検討結果をまとめる。			
	CAT 雑誌東大	12/13～12/15		
	実務研修修了	12/15		

○　下半期研修事業：CAT/ILL 講習会

専門研修（図書系：総合目録 DB、リテラシー、職員講習会）

○　CAT/ILL 講習会：WG（「目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討ワーキング・グループ」で検討中

既存体制の見直し

e-Learning 導入

地域との連携

＊ 講師人員の確保

＊ 副次教材等の充実

○　総合目録 DB：上記 WG で関連して検討中
　　カリキュラム改訂
　　品質管理に対応できる人材の育成
○　リテラシー研修：過去記録（アンケート等）の分析
　　カリキュラム見直し？
○　職員講習会：過去記録（アンケート等）の分析
　　キャリア研修としての位置づけ（長期研修、フレッシュパーソンセミナー）
　　運営体制の問題（長研－筑波大学、職員講習会－NII）

参考：教育研修事業：http://www.nii.ac.jp/hrd/
　　事業要綱掲載内容のほか、過去の記録・成果物等を掲載
　講習会担当者のための情報ページ：http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/course/index.html
　　講師・講師補助担当者、地域講習会連絡担当者のための各種情報を掲載
　WG 中間報告書：http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_info_WG_edu.html

■　焦点を当てる課題

　9 月以降、職員講習会に焦点をあて、カリキュラムや他の研修に対する位置づけの検討を行いたい。受講者と職務経験年数が近く、自分の観点が生きる可能性が他の研修に比べて高い。10 月中旬に、実際に職員講習会を聴講した後、それまでに考えた案をさらに練り、最終的にまとめるようにする。

　また、長期研修、フレッシュパーソンセミナー等、他の研修との位置づけを検討する中で、学内、東北地区で実施すべき研修内容を考える。

参考 2

実務研修の進捗状況

平成18年10月4日

	実務研修全体	職員講習会見直し	東北地区･東北大学研修
8月･9月の調査･作業	目録講習会聴講・実施 DB研修聴講 ポータル研修聴講・実施 リテラシー研修講師依頼・打合せ 職員講習会講師依頼・打合せ 目録系講習会検討WG陪席 その他出張（広大リポジトリ等）	カリキュラム分析 アンケート分析 長期研修カリキュラム分析 筑波大学との打合せ資料 「教育研修事業の体系化に関する報告書」 各地区のフレッシュパーソンセミナー開催状況	東北地区・東北大学での既存研修把握 東北地区・東北大学での利用者教育活動の現状把握 国立国会図書館「レファレンス研修」 CILIP研修コース「Giving a good answer」 レファレンス関連文献調査 東京大学 図書館職員研修サイト 京都大学 図書館職員研修サイト ICU・東邦大での打合せ
今後必要な作業	職員講習会聴講 リテラシー研修聴講 その他出張（図書館大会等） その他実務（研修準備等） 報告書アウトライン作成 報告書執筆	アンケート・カリキュラム詳細分析 研修関連文献の調査 聴講結果の反映 今年度アンケート結果の反映 報告書アウトライン作成 報告書執筆	研修の方針決定 企画案の作成 東北大への提示・フィードバック依頼 フィードバックに基づく修正 報告書アウトライン作成 報告書執筆
報告書の内容	・研修の目的 ・実務スケジュール ・実務内容のまとめ ・所感	・検討の経緯（研修の位置付け等） ・アンケート等に基づいた問題点の指摘 ・改善カリキュラム、実施方法の検討 ・具体的な改善案の提示 ・実施に向けての課題	・東北地区・東北大学での研修実施状況 ・東北地区・東北大学での利用者教育の現状 ・必要な研修の提案 ・具体的な企画案の提示 ・実施に向けての課題、スケジュール

今後のスケジュール案

平成18年10月4日

		実務研修全体	職員講習会見直し	東北地区･東北大学研修
10月	上旬		アンケート・カリキュラム詳細分析 研修関連文献の調査	研修方針決定・企画案作成
	中旬	職員講習会聴講	職員講習会聴講	東北大にアイデア提示
	下旬	全国図書館大会参加	京大会場アンケート集計	具体案作成
	末		報告書案①作成・提示	報告書案①作成・提示
11月	上旬	リテラシー研修聴講	アンケート結果反映	具体案作成
	中旬	国際シンポジウム参加 図書館総合展参加 報告書案①作成・提示		東北大からのフィードバック
	下旬		東大会場アンケート集計・反映	フィードバックを元に修正
	末		報告書案②作成・提示	報告書案②作成・提示
12月	上旬	報告書まとめ	報告書まとめ	報告書まとめ
	中旬	成果報告会	成果報告会	成果報告会

平成18年12月12日
開発･事業部専門研修

実務研修成果報告

開発･事業部実務研修生
永井　伸

自己紹介

- 東北大学附属図書館　総務課　情報企画係
- 情報係
  ･電子ジャーナル･データベース利用手続き
  ･リンク集メンテナンス
- 企画係
  ･授業「大学生のための情報検索術」
  ･電子ジャーナル･データベース説明会
  ･オープンキャンパス
  ･機関リポジトリ

今日の話題

- 研修の概要
- 実務内容
- 学んだこと･考えたこと
- 東北地区での研修企画

実務研修の概要

- 受入先
  企画調整課研修係
- 期間
  平成18年8月1日(火) ～ 12月15日(金)
- 概要
  (1)教育研修事業の実施に関わる実務
  (2)出張等
  (3)東北地区における研修の検討

テーマ設定の動機と目的

- 動機
  ･研修機会がなかった
  ･引継ぎの不安･業務方法の不統一
  ･職員数が減る中でのサービス維持･向上
- 目的
  ･研修企画･運営方法の習得
  ･東北地区での研修企画

研修の質の向上･機会の増加

実務研修内容

1. 実務
   - **目録システム講習会**
     会場準備（端末準備、資料配布）、受付、所内ツアー引率
   - **学術情報リテラシー教育担当者研修**
     カリキュラム検討、講師検討、講師依頼、講義概要作成補助
     講義内容事前打合せ
   - **大学図書館職員講習会**
     講義概要作成、講師との事前打合せ
   - **学術ポータル担当者研修**
     資料印刷、実施（名古屋大学会場での受付、講義室設営、写真撮影など）、アンケート集計

実務研修内容

2. 出張等

- 8/28 広島大学図書館ワークショップ参加（広島大学）
- 9/20 次世代スーパーコンピューティングシンポジウム参加（丸の内）
- 9/21 e-Learningオープンフォーラム参加（青山学院大学）
- 10/16 大学図書館近畿イニシアティブ活動内容調査（京都大学）
- 10/25 国大図協中国･四国地区における研修の調査（岡山大学）
- 10/26-27 全国図書館大会参加（岡山）
- 11/17 NII教育研修事業国際シンポジウム参加（東北大）
- 11/20 図書館総合展参加（パシフィコ横浜）
- 11/28 東京都IT講習会聴講（NII20階実習室）
- 12/7 国会図書館DBフォーラム参加（国立国会図書館）
- 12/8 国大図協関東･東京地区フレッシュパーソンセミナー聴講（筑波大）

実務例：学術情報リテラシー教育担当者研修

- カリキュラム案･講師検討
  ･「レポート作成指導」
- 講義概要の作成
  ･企画段階で全体を知っているのは研修係だけ。
- 講師との打合せ
  ･メッセージを引き出す
- 講師依頼の事務

実務例：学術情報リテラシー教育担当者研修

- アンケート結果（レポート作成指導）
  ･「今まで受けたことのなかった内容で大変ためになった。これから自信を持って学生に指導できる。」
  ･「実践的な内容として、ガイダンスの際に活かせそう」
  ･「これからやらなくてはならないと感じていたので参考になった。」
- アンケート結果（全体）
  ･「丁寧に練り上げられた充実の時間割だったと思う。」
  ･「非常に貴重な体験だった。研修でここまで「役に立つ!」と感じたことはない。」

学んだ点(1)：工夫された研修形式

- オリエンテーション&プレゼンテーション(リテラシー研修)
  ･「実践と理論の両方を聞けたので特に役に立った。」
  ･「実際のプレゼンを検討する形でとてもわかりやすく、有意義だった。」
- ロールプレイ、著作権実習（ポータル研修）
  ･「実際に考えられる質問があって大変参考になった。」
  ･「聞くだけではなく色々な事例を検索し答え（結果）を導くという一連の流れを実際に経験ができたことはとても勉強になった。

受講者が考えて教える

学んだ点(2)：つながりを生む配慮

- 懇親ランチ
- 参加者プロフィール
- 所内ツアー
- ランチマップ

普段と違う環境、時間を楽しむ

提案：アピールの必要性

- アピールの場
  ･研修事業ウェブサイト
  ･成澤さんの記事
- 改善の余地
  ･NIIの概要
  ･文教速報
  ･職員講習会の運営

提案：アピールの必要性

- さらなるアピール方法
  - ・レポート作成、所属機関に提出
    （大学図書館職員講習会）
  - ・図書館報への掲載記事収集
  - ・アンケートの掲載

業務維持のためのアピール

提案：大学図書館との連携

- 目標：大学図書館の底上げ
  - ・「大学等において日本の学術情報基盤を支える人材の育成に積極的に取り組む」（教育研修事業要綱）

（1）事業と密接な関係
- ・目録システム・ILLシステム講習会
- ・総合目録データベース実務研修
- ・学術ポータル担当者研修

（2）図書館員の資質向上
- ・大学図書館職員講習会
- ・学術情報リテラシー教育担当者研修

提案：大学図書館との連携

- さらなる底上げの要望
  - ・「いつもお願いしていますが、小規模大学ではリポジトリの構築などなかなか実現が難しいと思いますので、全体の底上げを目指した取組みを希望しております。」（ポータル研修アンケート）
- 研修係の実情
  - ・増える研修
    - H15: リテラシー研修、ポータル研修
    - H16: 大学図書館職員講習会
  - ・大学図書館の実情把握が困難

大学図書館からの働きかけ
大学→地域→NII

東北地区での活動：現状

- 東北地区大学図書館協議会
  - ・61館が加盟（国立15、公立12、私立34）
- 60回総会記念事業
  - ・「図書館のすすめ –大学図書館利用ガイド」
- ウェブサイトの開設
  - <http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/>

加盟館の協力による成果

東北地区での研修：現状

- 実施状況
  - ・合同研修会・・・　各県持回り
  - ・フレッシュ・パーソン・セミナー・・・　東北大中心
  - ・NII地域講習会・・・ 東北大中心
- 地区で研修を行うメリット
  - ・研修会場が近く参加しやすい
  - ・単独実施できない館にも研修機会
  - ・全国単位より動きやすい

東北地区での研修：課題

- 課題

（1）体系的な研修企画
（2）加盟館の多様なアイデア・要望の集約
（3）企画ノウハウの継承と内容の継続的見直し

⇒ ・研修WG設置
・研修体系の再構築・継続的な研修企画

まとめ

- 研修の実務を通じて
  ･内容だけでなく、形式にも工夫
  ･つながりを生むための配慮
  ･アピール、大学図書館とのさらなる連携

- 東北地区での研修
  ･協力して企画･運営

最後に

- 人脈
  ･研修、出張先

- 考える時間
  ･研修内容は図書館の未来を映す

- 受入態勢
  ･スケジュール管理･出張
  ･打ち込める環境

別紙 3-1

平成 18 年 9 月 29 日

第 3 回 eLPCO オープンフォーラム参加報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 9 月 21 日(木)　13:00-17:45
場所：青山学院大学　総合研究所ビル

1. 概要

eLPCO (Research center for e-Learning Professional Competency)は、e-Learning 専門家の育成、e-Learning を活用した教育プログラム・教育システムの研究と開発を目的とした組織。文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(2005-2007 年度)」に採択された。オープンフォーラムでは、展示、模擬授業、パネルディスカッション、事業中間報告等を通して、「メンタ」の役割の重要性が強調されていた。

2. e-Learning 専門家育成コースについて

・e-Learning の専門家として、インストラクショナルデザイナ、コンテンツスペシャリスト、インストラクタ、メンタ、ラーニングシステムプロデューサの 5 職種を設定し育成している。
・授業を修了すると科目完了証と総合試験受講資格が得られる。総合試験を受け合格すると、資格が認定される。
・授業は 2 種類。対面授業+e-Learning で大学の単位になるコースでは修了率 9 割。e-Learning のみで大学の単位にならない（総合試験の受講資格は得られる）コースでは修了率 2、3 割。
・12/7 から 12/21 まで教職員向け公開講座を開講予定。

3. メンタについて

・メンタの役割は、学習の進捗管理、事務連絡(講義内容に関する質問に、講師と連絡を取って対応することを含む)、激励。
・学生 40 名のクラスでは、講師 1 名、メンタ 3 名の体制で行っている。
・メンタは学生とのやりとりに 1 日 2 時間から 5 時間を割いている。客員研究員等、eLPCO の職員が行っている。
・e-Learning のみのコースの修了率を上げるために、授業からドロップアウトする時期、原因を分析し、メンタによる働きかけを集中的に行う必要がある。e-Learning システムに入らない学生とコミュニケーションをとる方法も検討の必要がある。

4. 所感

・授業を実施する上で、メンタの負担が非常に大きく感じられた。e-Learning には、随時利用可能、予習・復習が可能、受講者数制限がなくなる、対面式と併用することで理解を促進する等いろいろなメリットがある。何を目的として導入するかをはっきり意識しないと、負担がいたずらに増え、継続的な実施が難しくなる。

・対面授業では他の学生の前で質問しづらい事柄でも、e-Learning では 1 対 1 の関係となり質問が増えることもあり得るという話があった。e-Learning 導入により想定される事態をあらかじめ考えておく必要がある。

・授業を受講した学生からは、出欠や学習状況が確認できること、空いている時間に学習できることがメリットである一方、双方向性が足りない、テストが選択形式ばかりで添削がないといった不満の声があった。個別添削は難しいと思うが、テストやアンケートに対し、講師が全体的な講評を返すといったフィードバックがあると良い。

以上

別紙 3-2

平成 18 年 10 月 31 日

第 92 回全国図書館大会参加報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 10 月 26 日(木)～27 日(金)
場所：岡山シンフォニーホール、岡山県天神山文化プラザ

1. 大会概要

第 92 回の全国図書館大会は「晴れの国岡山から未来へ向けて　広げよう図書館の可能性」をテーマに岡山で開催された。初日は開会式、表彰式に続き、日本図書館協会理事長塩見昇氏の基調報告、児童文学作家あさのあつこ氏による記念講演があった。2 日目は 11 のテーマについて分科会が催された。

2. 第 2 分科会の概要

大学、短大、高専図書館を対象とした第 2 分科会は、「高めよう!学生の図書館利用満足度」のテーマで行われた。

(1)午前の部

・「学生への図書館サービスの点検と再構築」立教大学図書館事務部長　牛崎進氏

図書館サービスの変遷について、概論的な話があった。「この大学を卒業してよかった」と学生が思え、「この大学から採用してよかった」と企業が思える人材を育てるため、図書館として何ができるか考えていくべき、という話であった。

・「図書館の使命とアウトカム評価」文教大学湘南図書館館長補佐　戸田あきら氏

従来は蔵書数、閲覧席数、貸出冊数といった統計データが図書館評価に用いられていた。今後は、ますます重要となるリテラシー教育の成果を評価することが求められる。教育の実施前後にテストを行い、図書館が行ったリテラシー教育が学生に与えるより直接的な影響を測定し、評価する必要があるのではないかということを強調していた。

(2)午後の部

大学・短大分散会と高専分散会とに分かれたため、大学・短大分散会に参加した。

・「大学図書館の教員へのアプローチ：長崎大学ファカルティ・ディベロップメントの試み」
長崎大学大学教育機能開発センター助手　長澤多代氏

長崎大学では教員の授業改善のためのファカルティ・ディベロップメントのプログラムを実施している。図書館が学生を直接教育するのではなく、教員に情報検索手法の方法、重要性を認識してもらうことで、学生の教育内容に反映させることを狙っている。

・「呼び起こせ!学生利用者の潜在欲求」同志社大学　井上真琴氏、中島晴子氏
　学生の要望を調べると、既に提供しているサービスにも関わらず認知されていないことが多い。そのため、双六形式のチラシを作成するなど、広報に力を入れている。
　また、選書基準を教員に公開したり、シラバスと OPAC の連携を図るなどし、教員の理解を得た上で、学生用資料の収集について主導権を握っている。

・「学生図書委員の活動について」くらしき作陽大学　高橋加奈氏
　図書館司書が学園祭での企画展実施を学生に呼びかけ、集まった学生をきっかけに、図書委員を制度化した。本や CD の選定など、図書館の業務を助けている。企画展の準備は、学部間の学生の交流にも役立っている。

・「選書が開く学生サービスの可能性」一橋大学附属図書館情報推進課長　大森輝久氏
　最近の大学図書館に関する書籍には出てこないことが多いが、選書は図書館業務の基本である。レファレンスも情報リテラシー教育支援も選書の質が高まってこそ有効になる。
　一橋大学では、「ほんの窓」という書籍紹介チラシを発行しており、執筆作業は職員の研修としても役立っている。

4. 所感
・学生の利用満足度を高めるというと、リテラシー教育の充実といった、利用者と直結する部分での改善がすぐに頭に浮かぶ。ところが、同志社大学井上氏の発表、また一橋大学大森氏の主張は、リテラシー教育もレファレンスサービスも、適切な資料構築があってこそ成立するというものである。学生の教育学習用資料の選択、購読、提供に図書館が責任を持って取り組むことを内外に示している活動が素晴らしいと感じる。資料についての深い知識を持つための日々の努力と、その結果をデータや選書基準として公開することで、予算面での理解も得られやすく、図書館職員の専門性のアピールにもつながっていると感じた。

・分科会も含め、すべての講演に字幕、もしくは手話通訳がついており、あらゆる人に対して図書館はサービスを提供するべきである、という認識を新たにした。大学図書館では気づきにくい視点であると思う。

以上

別紙 3-3

平成 18 年 12 月 15 日

平成 18 年度国立情報学研究所教育研修事業国際シンポジウム
-求められる図書館サービスとスタッフ・ディベロップメント- 参加報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 11 月 17 日(金) 14:00-18:00
場所：東北大学マルチメディア教育研究棟大ホール

1. 概要

スウェーデン、オーストラリア、ニュージーランドの 3 カ国で勤務する図書館職員から講演があった。その後、会場からの質問も交えてパネルディスカッションが行われ、講演内容に基づいたより深い議論が行われた。

2. 講演会概要

・「Roles and Identity: Staff Development at Uppsala University Library」
Sue Dodd 氏(Uppsala University Library, Sweden)

演者はウプサラ大学図書館におけるスタッフ・ディベロップメントの企画運営責任者であり、養成プログラムの企画、実行、評価を担当している。とにかく一番大事なのはコミュニケーションであるという内容であった。スタッフニュースレターの発行や図書館の日の制定など、職員間のコミュニケーションを深める活動に力を入れているのが特徴である。図書館の独自性と使命をはっきりさせ、各職員にそれぞれが満足するような役割を与えればよい仕事ができるという話もあった。

・「Staff Development in University Libraries in Australia」
Liz Walkley Hall 氏(Flinders University Library, Australia)

国単位、州単位、大学単位でのスタッフ・ディベロップメントの実施状況について報告があった。国単位では、3 つの団体が中心となり活動している。オーストラリア全国の図書館管理職を集合させるという役割も持っている。

州単位では、トレーニング・セミナー等の通常の研修形式に加え、図書館相互体験プログラムも行われている。

フリンダース大学では月一回程度、一年を通して研修が行われている。できるだけ全員が受講できるよう日時を違えて繰り返し実施したり、研修資料をウェブで公開したりしている。会議への参加報告も行っている。

・「Staff Development in University Libraries in Australia」

Chie Emslie 氏(University of Auckland, New Zealand)

利用者へのリテラシー教育実施内容についての報告が中心であった。大学の政策として情報リテラシー教育が認知されている。職員向けのトレーニングは、レファレンスサービスとカスタマーサービスについてそれぞれ担当司書により開催されている。

3. 所感

・パネルディスカッションで、ウプサラ大学図書館の理念と職員への伝達方法を質問した。Sue Dodd 氏によるとホームページで公開しているような明文化した図書館の理念はなく、コミュニケーションが重要とのことだった。明文化したとしても、時代の変化とともに更新が必要であるとの回答だった。

・Chie Emslie 氏の講演では、レファレンストレーニングとカスタマーサービスについて担当司書により行われている図書館職員向け研修が興味深かった。どのような内容を扱うか項目が示されていたが、実施方法等の詳細が分かるとすぐにでも応用したいユニークな内容だった。

・ベテランの技術の継承プログラムがないという話がパネルディスカッションで出ていた。ベテラン職員の退職と臨時職員の増加に直面して、新しいスキルを身につけるだけでなく、技術継承のための研修も重要と感じた。

以上

別紙 3-4

平成 18 年 11 月 27 日

第 8 回図書館総合展参加報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 11 月 20 日(月)
場所：パシフィコ横浜

1. 講演会

(1)「TRANSFER –出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」
Nancy Buckley 氏(Chair of TRANSFER, UKSG / Blackwell Publishing)

出版社間で学術雑誌を移管する場合の、電子ジャーナルへのアクセス権や著作権の取り扱いについて一定の指針を設けるために設置されたのが TRANSFER である。

TRANSFER では移行情報のデータベースを構築し公開することも目的にしている。

・東北大学では電子ジャーナル管理業務に携わっているので、学術雑誌の出版社変更によるアクセス権の喪失は身につまされる問題である。2006 年初めに Blackwell から Nature Publishing Group への移行雑誌があり、事前に通知は来ていたが、移行のタイミングが不明であるなど問題があったと感じた。
・どれくらい強制力があるかという質問があった。まだ開始したばかりの取組みであり、出版社がどの程度指針に従うかは、TRANSFER や大学図書館の今後の活動にかかっている。
・尾城課長の発言にもあったように、地味かもしれないが利用者にとっては重要な問題であり、組織的な取組みが始まったことは有意義なことである。日本からは千葉大土屋先生が Advisory Board として参加しているということである。各大学図書館の電子ジャーナル管理担当者を中心に要望を出していくべきと思う。

(2)「Google 時代の図書館システム」
Barbara Rad-El 氏(Sales Support Manager, Ex Libris)

ExLibris 社の新しい統合検索システム「Primo」の紹介と電子ジャーナル管理システム「Verde」の紹介があった。

利用者がまず使う探索ツールがサーチエンジンであるという OECD の調査結果を示し、図書館システムが利用されないのは資料の種類に応じて異なるデータベースを検索する必要があるからであり、機関で利用できる検索システムを一箇所で統合検索できるようにするべきとの指摘があった。まだ試作段階だが、Primo では統合検索に加え、Amazon や Google が行っているように利用者の評価やコメントを検索結果に取り入れ、ユーザーの満足を高めることを狙っている。

Verde はオンライン資料の発見、選択、購読、アクセス管理など、全ての段階を適切に管理できるよう開発されたツールである。

・「Primo」はユーザーの手により検索情報を豊かにするだけでなく、ユーザーの参画を促し、検索システムの利用を促進することも狙っている。図書館としては検索方法や検索結果の精度を保つことに力を注いできたが、ユーザーによって加えられた情報の精度は必ずしも保証されないため、それらをどのように扱うかが課題であると感じた。
・会場はほぼ満席で、高い関心が伺えた。発表者が現役の図書館員であり内部の事情を知っているためか、図書館員の負担を増やさずに利用者の満足度を高めるシステム作りをするためには、という視点で話していたのが印象的だった。

2. その他

・スエッツ社のブースでは、リンクリゾルバの説明の際人だかりができており、関心の高さが伺えた。

以上

別紙 3-5

平成 18 年 12 月 15 日

国立国会図書館データベースフォーラム参加報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 12 月 7 日(木) 10:00-17:00
場所：国立国会図書館新館講堂

1. 概要

国会図書館が提供する 20 種類のオンラインコンテンツ・データベースの内容、使い方についての紹介がデモンストレーションを交えて担当者から行われた。コンテンツの内容別に四部構成で実施され、それぞれのコンテンツについて 20 分弱で説明があった。300 名が定員だが途中で申込みを打ち切ったということで、関心の高さが伺えた。

2. 各部について

・第一部：国会情報を活用する

「国会会議録検索システム」、「帝国議会会議録検索システム」、「日本法令索引」の紹介があった。今後の拡張予定についても触れられ、さらに収録データが増えるという。

・第二部：図書館を使いこなす

「NDL-OPAC」や「雑誌記事索引」等の紹介があった。概要の説明だけでなく、「著者名検索」では同姓同名の著者を一覧できることや、登録利用者に対する特典などの利用方法のポイントについても紹介があった。

・第三部：ウェブ情報探索/発見術

データベースの書誌情報を作成し、内容や NDL 資源タイプをキーにして検索ができる「Dnavi」、情報要求に対して調査のためのきっかけを与える「テーマ別調べ方案内」、国会図書館や大学図書館等、様々な館のレファレンス事例等を集めた「レファレンス協同データベース」等の紹介があった。

・第四部：広がるデジタルアーカイブの世界

NDL 所蔵の明治期刊行図書を電子化した「近代デジタルライブラリー」、「貴重書画像データベース」、ウェブサイトの保存を行う「WARP」、日本のデジタルコンテンツ全体を検索、閲覧するための統一窓口を目指す「NDL デジタルアーカイブポータル」等の紹介があった。

3. 所感

・通常利用するのはNDL-OPAC、雑誌記事索引ぐらいだったが、全部で40以上のオンラインコンテンツがあるという話で、国会図書館がこれほど多くのコンテンツを作成していたことに驚いた。

・一つのコンテンツにつき20分程度の説明時間であったため、詳しい情報は分からなかったが、今回存在を知ったことで今後活用できる。

・パワーポイントでの説明とデモンストレーションがあった。会場から、パワーポイント資料を印刷して配付すべきとの声があり、ウェブサイトへの掲載を検討するということであった。

以上

別紙 3-6

平成 18 年 12 月 12 日

国大図協関東地区・東京地区合同フレッシュ・パーソン・セミナー報告

実務研修生　永井　伸

日時：平成 18 年 12 月 8 日(金)
場所：筑波大学中央図書館 2 階集会室

1. 概要

関東、東京地区の国立大学図書館職員 16 名が参加した。筑波大学岡部係長から「カウンターから見た利用者 ―実例でみる利用者対応―」の講演があった後、共同討議、中央図書館の施設見学があった。

2. 講演について

・カウンターや館内でどういった問題利用者がいるかという実例と、具体的な対応方法が示された。図書館の規程や細則等に迷惑行為に関する記載がないことが多いという指摘があり、東北大でも確認したほうがよい。

・問題利用者に対応するときに職員が感じるストレスと、対応方法についての話もあった。利用者への対処だけでなく、自分の中に生まれるストレスにも対処するという観点は気づいていなかったが、カウンターで業務を続けていくためには重要なポイントだと感じた。

3. 共同討議について

・共同討議は、「ディスカッションの進め方」の資料を配布し、進め方を共有して進んだ。司会や書記は筑波大学の方が務め、受講者は話すことに集中できるようになっていたので、メモの心配などなく、安心して話せているようだった。

・自己紹介を兼ねて、参加者が A3 用紙に書いてきたテーマについてそれぞれ話した。用紙をホワイトボードに貼り付けてグループ化し、全体の討議テーマを決めるなど、決まった流れで実施された。討議時間が短く何か結論を出すことには至らなかったが、討議メモが事後に受講者に配布され、後で活かすことができる。

・初任者は会議の経験も少ないと思われるので、司会や会議のやり方を事務局側で誘導しながら行ってもらうことで会議のやり方の一手法を学ぶことができ有益だったと思う。

以上

別紙 4-1

平成 18 年 10 月 31 日

大学図書館近畿イニシアティブにおける研修の調査報告

実務研修生　永井　伸

近畿地区における図書館職員研修の運営について調査するため、下記の通り訪問を行った。

1. スケジュール

日時：平成 18 年 10 月 16 日(月)　10:30-12:00
場所：京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館
訪問者：学術情報係　辰野　直子氏

2. 大学図書館近畿イニシアティブ概要

大学図書館近畿イニシアティブとは、近畿地区の国公私立大学図書館を網羅した組織で、4 団体、約 130 大学の集合体である。2005 年 6 月 21 日に発足した。9 館からなる運営委員会と、事業を実施するための 2 つの委員会（能力開発専門委員会、広報・Web 専門委員会）を設置している。

3. 能力開発専門委員会について

・常置 10 名からなる。課長クラスもおり、20～30 代の若手は 3 名。関西学院大学、同志社大学、姫路獨協大学、京都産業大学、大阪府立大学、和歌山医科大学、神戸大学、大阪大学、京都大学から参加。研修事業の運営を目的としている。
・任期は 2 年、半数改選など、人選方法は検討中
・打合せはメーリングリストが主。主査がメールを投げてメンバーが返す形。平成 17 年度は、研修前日まで 365 件のやりとり。内容は役割分担、アンケート作りなど。集合形式の打合せは研修実施までに 3 回開催。
・運営費がないのがネックである。

4. 初任者研修について

・2 日間の日程で平成 17 年度から実施。図書館経験年数 3 年未満が対象。
・参加費を取っている(1000 円)
・講師は実務担当者中心。
・2005 年度は 38 機関(70 名)が参加。私立大学の参加者が多い。
・年齢構成は 20 代(36 名)、30 代(19 名)、40 代(7 名)、50 代(5 名)、60 代(1 名)、不明(2 名)

・勤務年数は 1 年目 28 名、2 年目 22 名、3 年目 16 名、4 年以上 4 名
・派遣職員が少なくとも 5 名参加。
・平成 18 年度は派遣、アルバイトも可で、60 名募集。

5. 今後の研修実施について
・基礎研修と中級研修を隔年で実施。
・初任者研修は基礎研修の一部。

6. 所感
・東北地区でもそうだが、集まっての打合せは回数が限られるので、メールによるやりとりと、会議前の事前準備が重要である。
・普段の業務に加えての役割なので、きついという声があった。実際に作業を行えるメンバーを確保するには、上からの割り当てだけでなく希望者を募る方法も必要ではないか。
・講師選定、依頼には人脈が必要で、経験年数の長い職員が委員として参加しているのは有益であるとのことだった。組織として研修を企画する場合、バランスの良い年代から委員を募るほうがよい。
・参加館にアンケートを行い、研修ニーズの把握を行ったということである。東北地区でもニーズの把握が必要だが、必要な研修の種類に加え、参加を阻害している要因の把握など、目的をはっきりさせる必要がある。

以上

別紙 4-2

平成 18 年 10 月 31 日

国立大学図書館協会中国・四国地区における研修の調査報告

実務研修生　永井　伸

中国・四国地区における図書館職員研修に対する取組みの状況調査のため、下記のスケジュールで訪問を行った。

1. スケジュール

日時：平成 18 年 10 月 25 日(水)
場所：岡山大学附属図書館
訪問者：学術情報部学術情報サービス課主査　古中　秀子 氏

2. 組織

国立大学図書館協会中国四国地区協会では、事業委員会の下に 3 つの事業グループがあり、事業を行っている。事業グループは、機関リポジトリグループ、地域講習会グループ、地域連携グループである。

また、係長が中心に参加し、年 1 回開催される国大図協中四国協会実務者会議がある。毎年検討テーマは変わる。平成 18 年度のテーマは、地域講習会グループからの要請があり「地域講習会、研修のあり方について」となった。10/30 に開催される予定。

3. 研修の検討内容

・目録、ILL の地域講習会が打合せの主内容である。もともと目録地域講習会は開催場所を年度ごとに立候補で決めていたが、ローテーション制とする動きがあった。
・開催館以外の館から講師を派遣することを考えている。DB 研修受講者はいても、現在別業務についていることが多く、講師の確保が難しい。ILL 講習会でも状況は同じである。
・地域独自の研修案としては、洋書、和漢書など、特殊な資料をテーマにしたものを考えている。
・目録講習会を公立図書館職員に聴講してもらうなど、県立図書館等との連携を行っている。研修会場の提供を県立図書館等に依頼するなど、相互連携を考えている。
・人事交流の際の目安として利用できるよう、職員の認定制度を実施している。講習会の受講、講師経験、記事の執筆等をポイント化し、一定のポイントを満たした時点で申告することにより、審査を経て認定する。昨年ぐらいから開始している。

以上

別紙 5-1

東北地区大学図書館協議会における研修の再検討について

-地区図書館職員のサステイナブル・ディベロップメントを目指すために-

1．概要

東北地区大学図書館協議会では各種の図書館職員向け研修を実施してきたが、さらに効果的な研修を提供し、持続的に職員のスキルを高めるには、既存の研修体系を再構築することが必要である。大学図書館の安定した運営を人材育成のため、協議会に研修検討組織を常置し、研修体系の再構築と研修内容の企画を行うことを提案する。

2．東北地区における研修の現状と課題

(1)実施状況

研修名	概要	運営体制	実施状況		
			H16	H17	H18
合同研修会	基調講演と数件の事例報告	毎年担当県を決めて企画	27館67名参加	26館46名参加	27館44名参加
フレッシュ・パーソン・セミナー	講義と共同討議	東北大中心で企画		22館44名参加	
目録システム地域講習会	講義と実習	東北大中心で企画	図書(山形大)	図書（東北大）	図書・雑誌(東北大)

(2)課題

地区での研修実施には、次のような利点がある。

・全国的な研修に比べ開催地が近く、参加しやすい。

・単独で研修実施が難しい小規模大学にも研修機会が提供できる。

・全国単位より動きやすく、各大学の多様な視点を活かした研修企画ができる。

しかし、現在東北地区で行われている研修には次のような課題がある。

・運営体制が同一でないため、各研修の体系的な企画が難しい。

・限られた館で研修を企画すると、加盟館の多様なアイデアを活かしにくい。

・毎年担当県が変わると、企画ノウハウの継承や反省点の改善が行いにくい。

3．課題解決のために

(1) 地区で行う研修の位置付けを明確にし、研修を体系的に企画できるようにする。

(2) 加盟館の多様なアイデア・要望を吸収できるようにする。

(3) 企画ノウハウの継承、研修内容の継続的な見直しができるようにする。

⇒ 研修検討WGを設置し、研修体系の再構築・継続的な研修企画を行う。
（研修検討WGの具体案を別紙１に､研修実施体系の案を別紙２に示す。）

別紙１

研修検討 WG の具体案

(1)目的

既存の研修(合同研修会、フレッシュ・パーソン・セミナー、NII 地域講習会等)のあり方を見直し、地区で行う研修体系を再構築すること、また、研修の内容を継続的に検討し企画することを目的とする。

(2)活動内容

・長期的な研修実施計画の検討
・年度毎の研修実施計画の策定
・個々の研修の具体案（目標、対象者、カリキュラム、場所、時期、講師など）作成
・研修実施のための事務作業の支援（割当案の作成など）
・アンケート等による、加盟館の研修ニーズ把握
・研修スケジュールや成果の広報・共有

(3)組織形態

協議会の下に常置
メンバー：国立 2 名、公立 1 名、私立 3 名
オブザーバー：研修会場館担当者 1、2 名

(4)開催頻度：年 3 回程度の会合とメールでの打合せ

1 月（当年度の反省と次年度の基本計画策定）
5 月（7月に行う研修の打合せ）
9 月（12 月に行う研修の打合せ）

(5)予算：会合のための交通費、会議費（一回 6 万円程度）

(6)実施スケジュール

2007 年 7 月：	協議会幹事会に WG 設置の具体案提出。 福島地区での合同研修会参加・調査。
9 月 21 日：	総会で WG 設置を承認。
9 月末：	第 1 回 WG 開催（顔合わせ、12 月の研修内容決定)、業務分担（事務、カリキュラム作成・講師依頼、広報）
10 月中旬：	第 2 回 WG 開催（詳細事項決定、広報開始、NII 地域講習会検討）
12 月上旬：	研修実施
2008 年 1 月：	第 3 回 WG 開催（反省、次年度以降の改善）

別紙２

研修実施体系案

１．概要

(1)回数：年 2 回（7 月・12 月）

(2)内容：業務別研修 1 回とキャリア別研修 1 回

(3)留意点

・NⅡの地域講習会は別途実施する。

２．研修内容

(1)基本方針

・国公私立の別なく有用な内容とする。

・職員数の少ない館の職員にも有用な内容とする。

・常勤・非常勤の別なく受講可能とする。

・グループ討議を含める等、受講者参加型の時間を設ける。

(2)業務別研修

担当業務別に、スキルの維持、向上を図るための研修。

例）

・接遇

・情報検索の方法

・目録規則

・電子ジャーナル管理

・図書館ガイダンス

・業務マニュアル作成方法と引継ぎ方

・業務内容についての討議

(3)キャリア別研修

新入職員向け、係長級職員向け等、職員の経験、役職に応じたスキルを習得するための研修。

例）

・フレッシュ・パーソン・セミナー（新入職員）

・コーチングの基礎（係長級）

・図書館アピールのためのアンケート・統計データの使い方（部課長級）

参 考

東北地区大学図書館協議会における研修実施状況

1．合同研修会実施状況

・平成 15 年度

日時：平成 15 年度 7 月 30 日(水)

場所：弘前大学創立 50 周年記念会館

発表者	内容
京都精華大学情報館 システム情報課長 小松 泰信氏	基調講演「キャンパスポータルによる図書館のサービス戦略」- 総合的情報化とパーソナラゼィション -
山形大学附属図書館 情報サービス課学術情報係長 坂本 芳廣氏	事例発表「学術情報発信機能と図書館サービス」- 手作り電子図書館への取り組み -
青森県立保健大学図書館 総括主査 小野 由美氏	事例発表「インターネットを利用した図書館サービス」
東北学院大学中央図書館 逐次刊行物係 安部 茂徳氏	事例発表「図書館サービスの現状と課題」- 東北学院大学図書館の一事例

・平成 16 年度

日時：平成 16 年 7 月 30 日(金)

場所：岩手大学情報メディアセンター図書館 2 階 生涯学習・多目的学習室

発表者	内容
早稲田大学所沢図書館 仁上 幸治 氏	基調講演「利用指導サービスと広報戦略」ー専門性を訴求する取組みのポイントー
盛岡大学･盛岡短期大学部図書館 総務係長 関口 悦子氏	事例発表「文献利用講座の実施」
福島大学附属図書館 学術情報係長 南 俊二氏	事例発表「情報探索基礎講座」による利用者教育
東北大学附属図書館 総務課情報企画係長 米澤 誠氏	事例発表「職員向け研修と利用指導スタッフの育成」

・平成 17 年度

日時：平成 17 年 7 月 22 日(金)

場所：国際教養大学管理棟 4 階講堂

発表者	内容
国際教養大学 図書･情報センター長 勝又 美智雄氏	基調講演「24 時間オープン図書館の実情と展望」
秋田経済法科大学附属図書館 事務課課長 堀井 正勝氏	事例発表「今後の図書館のありかたについて」
秋田県立大学本荘キャンパス図書･情報センター主任 成田 亮子氏	事例発表「本学における休日夜間利用について」
秋田公立美術工芸短期大学附属図書館産業デザイン学科助教授 金 孝卿氏	事例発表「図書館活動－図書館同好会とともに」
秋田大学附属図書館 図書情報係長 加賀谷 龍悦氏	事例発表「秋田大学附属図書館の新たな取り組みについて」

・平成 18 年度

日時：平成 18 年 7 月 27 日(木)

場所：東北芸術工科大学　本館 6 階第一会議室

発表者	内容
東北芸術工科大学 大学院長･東北文化研究センター所長 赤坂 憲雄氏	基調講演「地域の時代のなかで」
福島大学附属図書館情報サービス係長 南 俊二氏	事例発表「福島大学サテライト「街なかブランチ」におけるデリバリーサービス」
岩手大学情報メディアセンター図書館利用サービスグループ主査 田畑 由美子氏	事例発表「ビジネス支援情報コーナーの設置 ―創業による地域の活性化のために―」
東北大学附属図書館情報管理課受入係 木戸浦 豊和氏	事例発表「東北大学附属図書館での企画展の取り組み」

2．フレッシュ・パーソン・セミナー実施状況

・平成 17 年度
日時：平成 17 年 12 月 8 日(木)
場所：東北大学附属図書館

発表者	内容
東北大学附属図書館 総務課長 諏訪田 義美氏	大学図書館の役割
東北大学附属図書館 医学分館運用係長 今出 朱美氏	図書館カウンターでの接遇: 利用者対応の実例を中心に
宮城教育大学附属図書館 目録情報係長 菅原 淑子氏	目録データの作成と提供: NACSIS-CAT を中心に
東北学院大学中央図書館 閲覧係相互利用担当 小山 純氏	資料の活用: NACSIS-ILL を中心に
東北大学附属図書館 閲覧第二係長 菅原 透氏	カレントトピックス:「大学図書館における情報リテラシー」
全体討議	カレントトピックス:「大学図書館における情報リテラシー」の講演内容について

3．目録システム地域講習会実施状況

・平成 15 年度
図書コース
期間：平成 15 年 6 月 18 日(水)－6 月 20 日(金)
場所：東北大学附属図書館

・平成 16 年度
図書コース
期間：平成 16 年 9 月 1 日(水)－9 月 3 日(金)
場所：山形大学附属図書館

・平成 17 年度
図書コース
期間：平成 17 年 6 月 15 日(水)－6 月 17 日(金)
場所：東北大学附属図書館

・平成 18 年度
図書コース
期間：平成 18 年 6 月 28 日(水)－6 月 30 日(金)
場所：東北大学附属図書館

雑誌コース
期間：平成 18 年 7 月 19 日(水)－7 月 21 日(金)
場所：東北大学附属図書館

別紙 5-2

「カウンター対応研修 -利用者の学習・研究支援を促進するために-」講習会の開催について（案）

図書館利用案内の刊行や、利用者向けの情報検索講習会等の活動により、図書館の有用性が認知されつつある。学習や研究のための情報入手を期待して来館した利用者に対し、参考調査係だけでなくカウンターに出ている全ての職員が自信を持って対応ができるよう、標記の講習会を開催することを提案する。

1．目的

職員の利用者対応スキル、文献探索技術を伸ばし、利用者からの質問に職員が自信を持って応対できるようにする。利用者の満足度を上げ、図書館職員の存在をアピールすることを目指す。

2．目標

・利用者対応の基本的な留意点を理解、習得する。
・資料入手に関する質問に対し、回答を作成するための一般的な手順を理解する。
・情報探索の基礎的な方法を習得する。

3．対象・定員

・カウンター業務を行っている東北地区大学図書館協議会加盟館職員。初任者優先。
・定員 30 名程度

4．開催会場・期間

・東北大学附属図書館で開催。1 日。

5．カリキュラム案

・利用者対応の留意点（接遇）
・利用者の質問に対する回答作成の流れ（質問内容の把握方法、回答時の留意点など）
・情報探索方法の基礎
・実習、演習を含める。検索結果、回答の比較検討など、体験型を基本とする。

別紙 5-3

「業務引継ぎ研修」の開催について（案）

1．目的

業務マニュアル作成方法、メンテナンス方法を学び、自館における業務マニュアルを作成する。また、他館との比較を行うことで、業務の改善、効率化につながるようにする。

2．目標

・業務マニュアルの作成、メンテナンス方法を習得し、たたき台を作成する。
・たたき台に基づき、他の館と業務内容を比較することで、改善できる点を見つける。

3．対象・定員

・加盟館職員。常勤、非常勤問わない。
・定員 30 名程度

4．開催会場・期間

・東北大学附属図書館で開催。1 日。

5．カリキュラム案

・事前に配布したフォームで業務マニュアル作成
・業務マニュアル作成、管理についての講義
・講義を受けて、各自修正
・2 人組でわかりにくいところを指摘、修正
・同じ業務でグループを作り、業務改善について討議

別紙 6-1

平成 18 年 10 月 31 日

平成 18 年度大学図書館職員講習会（京都大学会場）参加報告

実務研修生　永井　伸

1. 講義

・多少時間不足となることはあったが、妥当な時間配分。
・アウトソーシングの話は賛否があった。
・スクリーンが小さく、インターネットの画面等は、後ろからは見にくい。
　→東大会場では事前配付。
・質疑のためあらかじめ 10 分程度確保するよう講師に伝える。質疑応答は議論が深まる。
・ヒントや考え方を指摘する講義が多数あるので、それを元に自分の問題として捉えたいと感じる。レポートとしてまとめると達成感がある。
・実習形式のコマが 1 日一つぐらいあると良い。

2. 見学

・一班 20 名は多い。プレゼンの手本とするなど、狙いが必要。

3. 共同討議

・発表者をその場で決める方式は良い。
・ホワイトボードがあり、討議環境は良い。
・班の人数を少なくしたほうが良い。（一通り発言してもらうだけで 1 時間以上経過）
・助言者の役割の明確化、受講者への周知が必要。（自らの経験を元に発言してもらう、参加していない人に参加を促す。討議の時間配分を示す、等。）
・報告の際、質疑応答時間があると良い。
・同テーマの過去の討議資料の公開、配付が必要。年々内容を発展させるために。
・事前にテーマを示し、必要な資料を準備してきてもらうことを徹底しても良い。
・パワーポイント作りが大変なようだった。

5. その他

・同世代の参加者が多く、全体的に盛り上がっていた。
・研修中に自分で考えたり、振り返ったりする時間が欲しい。
・モチベーションが高まったというアンケート結果が多かった。従来の研修目的（最新知識の習得）に加え、モチベーションを高め、今後の目標を見つけること、等を研修目的に追加して受講者に周知すると研修の効果がより高まるのではないか。
・アンケートの項目は「参考になった」、あるいは「有益であった」に統一すると、受講者が回答しやすくなるのではないか。

以上

別紙 6-2

平成 18 年 11 月 30 日

平成 18 年度大学図書館職員講習会（東京大学会場）聴講所感

氏名　永井　伸
所属　企画調整課研修係

1 日目：

10:00-11:30　講師：北　克一（大阪市立大学 大学院創造都市研究科 兼 学術情報総合センター 教授）

・ 大学図書館に対する利用者の期待

【所感】

電子ジャーナル等のオンライン資料の利用があたりまえになると、それに対し人やお金を払う応援団がいなくなるという話はもっともだと感じた。東北大学で電子ジャーナルアクセス管理を行っているが、連絡が来るのはほとんど苦情である。図書館が陰でどのような業務を行い、アクセスを維持しているのかをアピールし、業務に対する理解を得なければと感じた。

12:45-14:15　講師：茂出木　理子（お茶の水女子大学 附属図書館 図書・情報課長）

・ 大学図書館の現状と課題

【所感】

予想外の予算が来たら何に使うかということを常に考えて、アイデアを暖めておくべきという話が良かった。何か事業を行う時に、そんなことをしても無駄、と否定するだけでなく、説得できるような代案をいつも準備しておくことは大事だと思う。

14:25-15:40　講師：保科　恵美子（日本アスペクトコア株式会社 第二営業本部長）

・ 大学図書館業務のアウトソーシング

【所感】

アウトソーシングできない業務は何なのかを考えさせられた。技術的なことは訓練すれば誰でもできるようになると思うが、図書館の様々な業務を経験した上で広い視野を持って今後のサービスの方向性を考えるのはアウトソーシングできない業務ではないか。専任職員は図書館として行うサービスの企画をし、それを他の職員とともにどうやって実施していくかを考えることが求められると思う。

15:45-17:00　講師：豊田　恭子（株式会社 NTT データ 営業部 環境ソリューション担当シニアマネージャー、ビジネス支援図書館推進協議会 理事）

・　大学の外側から

【所感】

大きい図書館が小さい図書館をサポートするという一方的な関係ではなく、小さい図書館でも専門性を持って特色を打ち出せば貢献できるという話が印象的だった。今後異動があった際も、その機関の特色を活かしたサービスを考えたい。

また、薄いサービスを広くやっても評価されず、良いサービスであれば限定的に行っていても評価が高まり、その後サービスが普及していくことがあるという話が印象的だった。あれこれと手を出すのではなく、既存のサービスの質の向上に努めるのが最優先だと感じた。

・ 共同討議

【所感】

研修 2 日目に行われた 1 班の共同討議を聴講した。「図書館職員研修を企画する」がテーマだった。発言要旨に参加者それぞれが独自の検討課題を書いており、事前準備を行うことで充実した議論ができていたと感じた。様々な検討課題のどこに焦点を当てるかについて議論が行われたが、ホワイトボード等があると、討議の流れを把握しやすく、より収束しやすかったと思う。

別紙 6-3

平成 18 年 9 月 22 日（12 月 1 日修正）

大学図書館職員講習会改善案

実務研修生　永井　伸

改善の目的

・研修目的を再検討する。
・他の研修との関係、違いを明確にする。
・受講者の研修後の活動改善をさらに促進する。

1. 講習会の目的

大学図書館等を取り巻く最新動向や重要なトピックを把握し、今後のステップアップの方針を検討することを通じて、業務に主体的に関わるための意欲を喚起する。

2. 到達目標

(1) 使命感を持って業務に当たるための動機づけを得ることができる。
(2) 世界的な動向や最新トピックなど、大学図書館の現状を広い視野で捉えることができる。
(3) 研修内容をもとに自分で設定したテーマについての理解を深め、活動推進、改善のための自身の行動計画を提案することができる。

3. 受講対象者

大学等の図書館に勤務する、過去に受講経験のない常勤の中堅職員（勤務年数 2 年以上）

4. 前提知識

大学図書館の業務全般について、概要を把握している（各係の業務概要がわかる）。

5. 開催期間

4 日間

6. カリキュラム

1 日目：幅広い視点からの話、モチベーションを高める内容、レポート作成方法講義
2 日目：サービス系の話、見学、共同討議①
3 日目：管理系の話、レポート作成実習①、共同討議②
4 日目：ステップアップの話、レポート作成実習②、共同討議報告

改善のポイント

1. 他研修との差別化

(1) フレッシュパーソンセミナーとの差別化

フレッシュパーソンセミナーでは大学図書館の職務を係別に知るのが目的。

職員講習会では係を超えた取組み、世界的な動向、新しいトピックなど広い視点を知る。また、どの係でも必要な力（レポート作成、情報検索、プレゼンテーション、スキルアップの心構え、共同討議等）の向上を目指す。

(2) 長期研修との差別化

長期研修は「学術情報に関する最新の知識を教授するとともに、図書館経営・情報サービスの在り方について再教育を行う」のが目的。係長級が主対象なので、事業や予算等のマネージメント方法習得を中心とする。組織としての目標・事業企画の立案、達成方法を学ぶ。

対して職員講習会では、受講者自身のレベルアップを主な目的とする。

2. 研修後の受講者の活動改善促進

(1) 講義内容の改善

・1 コマの中に講義テーマの概論と、講師の主張をバランスよく取り入れてもらう。

・会場館見学は、施設や活動内容の見学に加え、良い図書館オリエンテーションを学ぶ機会を兼ねる。

(2) レポート作成の導入

・4 日間通常業務を離れ、図書館について集中して考えを深める貴重な機会。

・広く浅くの研修報告ではなく、本人が決めたテーマで受講者自身の意見をまとめ、研修後の活動予定を提案。上司に提出してもらえば、NII 側にとってはレポート評価の手間が省け、研修評価や事業理解のための機会増加につながる。

・レポート作成方法の講義と、アウトライン作成のための実習時間を設ける。

(3) 事前準備と共同討議

・講義に先立ち目を通しておく資料を講師に挙げてもらう、レポートテーマの設定、参考資料の調査をしてもらうなど、事前準備を充実させる。

・受講者自身が活かせるように共同討議結果を残す。次年度の討議にも活用し、同じテーマの議論が年々深まるようにする。

・共同討議をスムーズに進めるため、討議のペース配分や参加者の議論への参加状況を確認し助言する人が必要ではないか。

今後の検討課題

1. 京都会場での聴講ポイント

(1) 講義

・講義、質疑応答、休憩の時間配分

・講義内容（重複、密度）

★今年度 75 分講義が混じっている。

・見学の方法は妥当か。

(2) テキスト

・形式、ページ数、内容、スライドの大きさ

(3) 共同討議

・テーマの具体性は妥当か。スムーズに入っていけるか。

・班と 3 役の決め方

・全員が参加しているか

・ペース配分ができているか。メモをとるなど、情報を共有できているか。

・討議・報告時間は適切か

・報告形式は適切か（報告資料配布の必要性など）

・年齢による制限は必要か。

(4) 会場

・マイク音量、空調、スクリーン

・進行

(5) アンケート

・項目、質問内容

・次年度へフィードバックしやすくする方法

2. 今後の課題

・過去の研修カリキュラム、アンケート結果、共同討議テーマを整理

・過去の職員講習会共同討議報告書の調査

・「図書館職員を対象とする研修の国内状況調査」(NDL Research Report No.5)の検討

・海外の事例をウェブ、文献を元に調査